

## VII 成果と問題点

### 1 宮戸 4 遺跡の T ピットについて

#### (1) 宮戸地区とエゾシカ

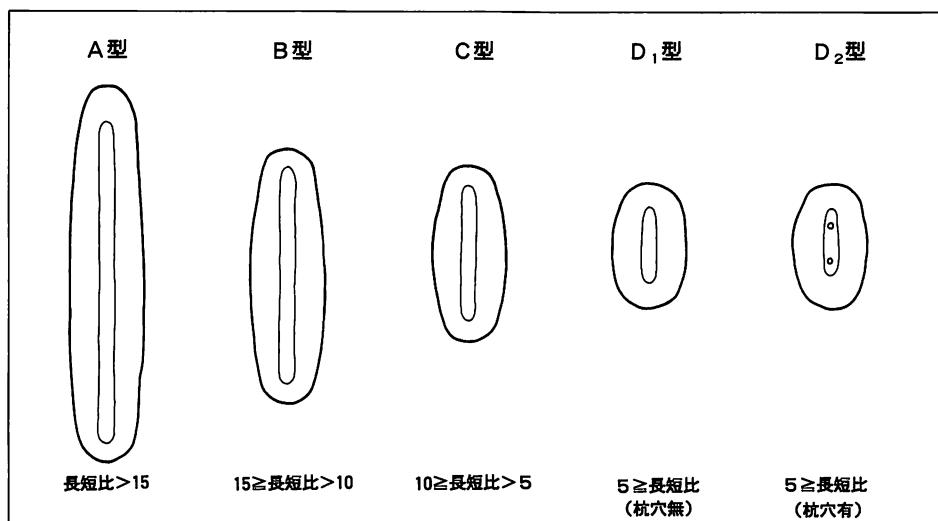
鶴川町の宮戸地区は古来より、エゾシカの猟場として知られていたらしい。『鶴川町史』(1968)は、アイヌのコタンに伝わる、エゾシカについての逸話を収録している。以下は原文のままである。

「コタンを驚ろかすものに鹿の移動があった。日高の山脈から樽前へ向けて夜間移動する鹿の大群が、時々イモクペの原野を駆け抜けた。まるで、砂利を満載したダンプが何百台も暴走するようだ。すさまじい音と風を切って空を飛ぶようなスピード、静かな夜、月光を浴びて、何百頭もの鹿の大群が駆け抜ける有様は、夢でも見ているような壯觀であった。こんなにいる鹿を狩って食膳に供することはた易いことだったが、折角作っている僅かな畠を荒らされるので、逆茂木をめぐらして守ったりする。その方がむしろ厄介であった。」

明治時代に入ってからも鶴川はエゾシカ猟が盛んで、特に宮戸地区は猟師仲買人の集合地として繁栄し、「明治七、八年ころには、胆振・日高一の賑わいを呈せり」との記録が残っている。

現在の宮戸地区は往時の活気が消え失せ、平穏な農業地帯となっているが、エゾシカは相変わらず出没しているようである。遺跡に隣接して農業を営む旧地主の山下与造氏(鶴川町議)は、「(道路)の工事が始まって大分減ったけれども、毎年鹿に畠を踏み荒らされるのが悩みの種だ。畠の傍に犬を飼つて鹿を追い払うようにしている。」と語っている。また、調査期間中にプレハブのすぐ近くでエゾシカを目撃したり、朝発掘現場の中に足跡が続いているのを発見することが頻繁にあった。

おそらく縄文時代においても、イモッペ川流域はエゾシカの良好な猟場として利用されていたのであろう。平成13年度の調査で、宮戸 4 遺跡より計13基の T ピット(陥し穴)が検出された(TP-5 ~17)。本遺跡では平成12年度の調査範囲からも T ピットが4基検出されている(TP-1~4、平成14年度報告予定)。同様に、昨年度は、周辺の宮戸 3 遺跡で32基、米原 4 遺跡で10基の T ピットが調査された(北埋調報153)。このように宮戸地区では、イモッペ川へ向かう沢筋に T ピットが多数設けられている。次年度以降の調査の進捗につれ、さらに検出数が増加する可能性がある。本稿では今年度検出された13基について、現段階での考察を行う。



図VII-1-1 T ピットの形態分類模式

## (2) 形態

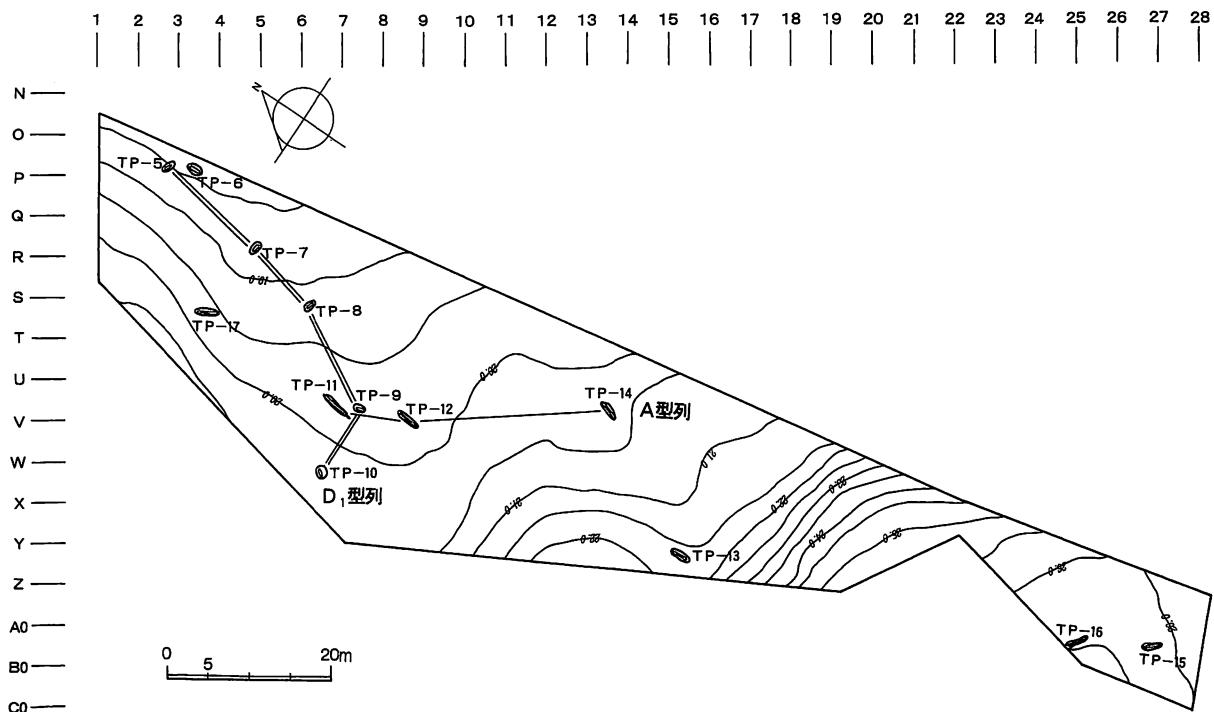
形態分類にあたって、従来の論文、調査報告書などで用いられてきた方法(森田・遠藤1982、大泉1987、谷岡1996など)を参考とし、底部の長軸・短軸の長さの比を用いた。すなわち、長短比15より大きいものをA型として、以下5毎にB型、C型、D型に分類した。A型は溝状に近い細長の楕円形、D型は短めの丸みを帯びた楕円形で、B型とC型はその段階的な中間となる。D型については、杭穴の有無でD1型、D2型に細分した(図VII-1-1)。今年度宮戸4遺跡で検出されたTピットは、A型4基(TP-11・12・14・16)、B型3基(TP-13・15・17)、C型0基、D1型5基(TP-5・7・8・9・10)、D2型1基(TP-6)であった(表VII-1-1)。数の多少は限られた調査範囲の中では比較できないが、C型が検出されない、D2型が少ない、などの傾向は見られる。

今回の形態分類は、Tピット全体の形状が最も反映されるという点で長短比を採用した。しかしながら、長短比で説明しきれない要素は複数残っており、その個々について検討する必要がある。まずは、掘り込みの深さである。構築面からの計測ではないが、大部分がVI層上面での検出なので同一条件と仮定する。A型・B型は1.20m以下と比較的浅いのに対し、D1型は1.30~1.50mと深めである。D2型のTP-6は1.17mとD1型よりも浅い。つまり、長軸の長いものは浅く、短いものは深く掘り込まれる傾向があるが、杭穴を有するものは例外と考えられる。底面の幅に注目すると、A型・B型はTP-11・17を除けば、0.20m以下と狭いものが多い。これに対しD1型はいずれも0.20m以上と幅広く、D2型のTP-6は0.40mと突出している。これは、比較的浅いA型・B型は上面から細く掘り込めるが、深いD1型は内部で作業するため幅広にしなくてはならないという工程の違いによると考えられる。また、D2型は底面に杭を立てるために、一定以上の幅を必要としたのであろう。

亜成獣以上の個体の場合、エゾシカは胴幅が約21~34cm、体高が約81~104cmだという(佐藤1986)。エゾシカがTピットに落ちた状態を推測すると、A型・B型・D1型はいずれも身体が挟まれて四肢が底面に届かず、自由を奪うことが可能である。一方で、D2型のTP-6はエゾシカが内部に落ちてしまうが、逆茂木に支えられて、身体が宙に浮くことになる。この場合、獲物の胴部の均衡を保つため、最低2本以上の逆茂木が必要と考えられる。このように形態は異なるが、エゾシカを捕獲するため、一定の規格を守って合理的に構築されている点は共通している。

表VII-1-1 Tピット属性一覧表

遺構名	平面形状	上端規模		下端規模		深さ(m)	長短比	横断面形状	縦断面形状	底面形状	杭穴	分類
		長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)							
TP-5	楕円形	1.57	0.83	1.07	0.21	1.50	5.10	V字型	袋状	中央が窪む	無し	D1型
TP-6	楕円形	1.81	1.12	1.65	0.40	1.17	4.13	U字型	オーバーハング	ほぼ平坦	2ヶ所	D2型
TP-7	楕円形	1.49	0.86	1.12	0.25	1.33	4.48	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-8	楕円形	1.54	0.85	1.22	0.24	1.30	5.08	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-9	楕円形	(1.39)	0.91	1.17	0.26	1.40	4.50	Y字型	袋状	傾斜する	無し	D1型
TP-10	楕円形	1.56	0.93	1.10	0.25	1.40	4.40	V字型	袋状	中央が窪む	無し	D1型
TP-11	長楕円形	3.57	0.70	4.36	0.28	1.13	15.57	Y字型	著しく オーバーハング	傾斜する	無し	A型
TP-12	長楕円形	(2.95)	0.68	2.45	0.14	1.20	17.50	Y字型	中端で オーバーハング	2段に 傾斜する	無し	A型
TP-13	長楕円形	2.60	0.93	2.17	0.19	1.14	11.42	V字型	船底状	ほぼ平坦	無し	B型
TP-14	長楕円形	2.65	0.72	2.31	0.10	1.12	23.10	Y字型	オーバーハング	ほぼ平坦	無し	A型
TP-15	長楕円形	2.07	0.75	1.93	0.17	0.83	11.35	V字型	オーバーハング	傾斜する	無し	B型
TP-16	溝状	3.40	0.47	3.04	0.18	0.91	16.89	I字型	船底状	ほぼ平坦	無し	A型
TP-17	長楕円形	2.54	(0.73)	2.75	0.23	1.13	11.96	V字型	オーバーハング	傾斜する	無し	B型



図VII-1-2 Tピット配列図

### (3) 立地・配列

Tピットの立地を見ると、標高22.0mより低い緩斜面上に11基、標高25.0mより高い台地上に2基検出されている(図VII-1-2)。また、緩斜面上のものについて、さらに微地形で分けると、中央の沢地形内2基(TP-13・14)、北側の沢地形内8基(TP-5～12)、北西側の斜面上1基(TP-17)となる。調査区内では北側の方が高密度に検出されているが、これはイモッペ川流域の遺跡群全体の傾向と一致する。100m<sup>2</sup>当りのTピットの出現率は宮戸3遺跡0.89、宮戸4遺跡(平成13年度)0.41と倍近い差があり、両遺跡間の未調査部分も同様に北側ほど多いと推測される。

形態分類別ではA型とD1型に配列が見られる。A型のうちTP-11・12・14の3基は、長軸方向が近似しており、沢地形を横断して設けられている(A型列)。また、D1型のTP-5・7・8・9・10の5基は、長軸方向は異なるが、北側の沢筋を沿うようにして設けられている(D1型列)。Tピットの長軸方向がエゾシカの進行方向と一致したと仮定することで、ある程度狩人の意図を推し量ることは可能である。すなわち、A型列は長軸方向がほぼ南北で、沢の出入り口に位置する。D1型列は北西側の微高地を仰ぎ見るような方向で、ぐるりと配されている。どちらの配列もイモッペ川へ向かうエゾシカを狙ったものであるが、沢筋か斜面かという進入路の想定が異なると推測される。

以上のようにTピットの配列は狩猟戦略の結果と考えられる。ある集団が一定の労働力で、同じ方法・道具を使用して、同時期に複数のTピットを作成した場合、これらが同じような規模や形態になる可能性が高い。しかしながら、厳密な規格性が存在したかは疑問である。立地や地形、植生、土質、天候、時間、人手などの制約が付帯したであろうし、いかに効率よく獲物を得るかという機能性が重視されたとみるべきである。筆者は、Tピットの形態はエゾシカが移動する際の地形による運動の習性・癖などに関係すると考えている。例えば、斜面を駆け下りる、障害物を飛び越える、平地をゆっくり進む、といった動きからエゾシカの姿勢を想定し、最も補足しやすい形態のTピットが構築され

たのではなかろうか。この推測はあくまで想像の域を出ておらず、動物生態学の面からもまだ検討の余地が多い。いずれにせよ、Tピットの形態と地形は密接に関係していると言えよう。

#### (4) 時期

これまで北海道のTピットの構築時期については、縄文時代中期後半～後期初頭とする意見が主流である(森田・遠藤1982など)。平成12年度に宮戸3遺跡を調査した大泰司統は、Tピット同士の切り合い関係を手がかりにして、「中期後葉から後期初頭という期間のなかでTピットの形態変化が頻繁であった」と推測している(北埋調報153)。宮戸4遺跡のTピットは、同じくイモッペ川左岸の沢地形に立地し、150mほどしか離れていない宮戸3遺跡とほぼ同時期のものと考えられる。

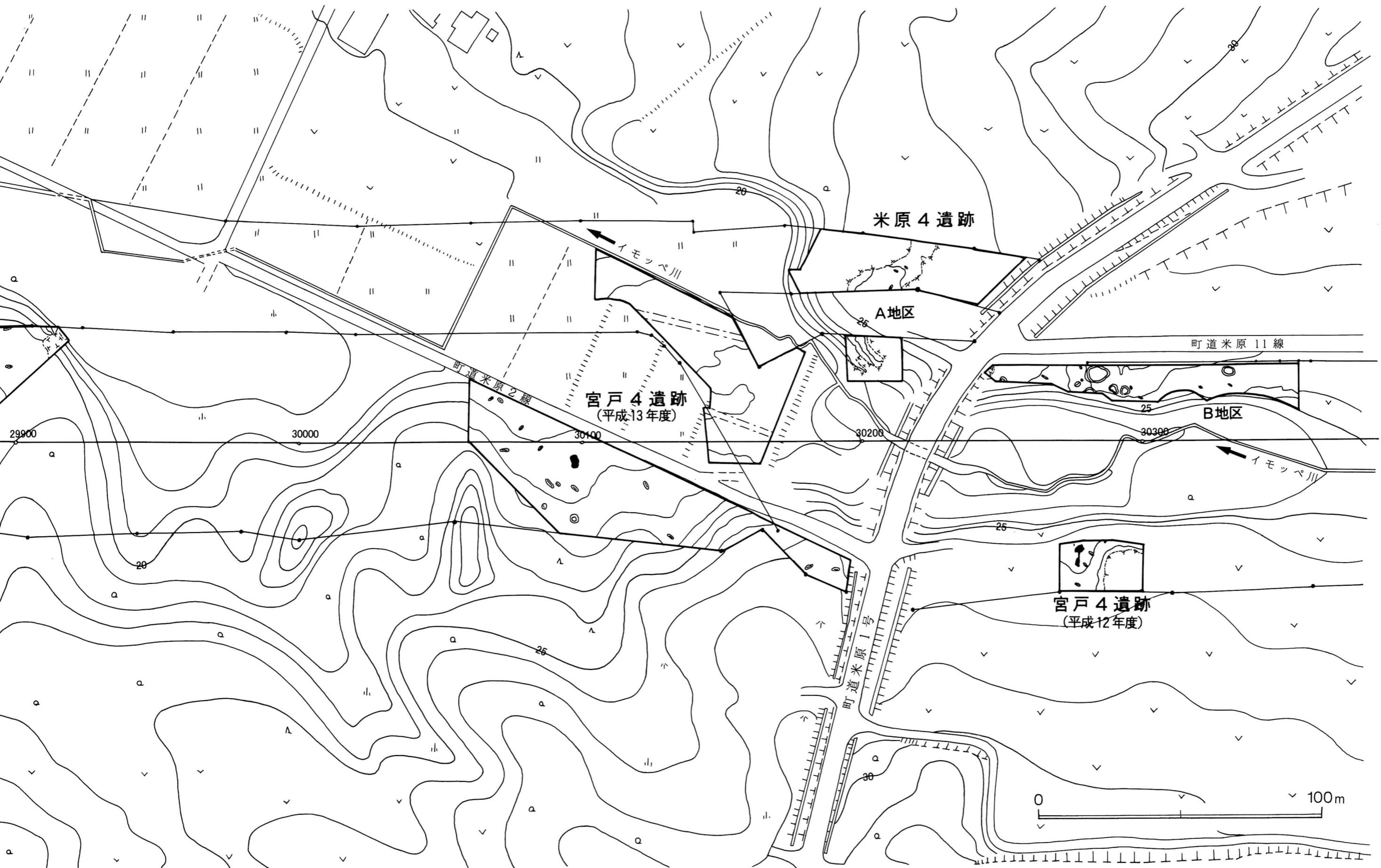
宮戸4遺跡の包含層遺物の主体となる時期は、縄文時代早期後半～前期前半である。この時期の遺構にはH-1やFC-1、多くの焼土があり、人間の生業活動が活発に営まれたと推測される。このような場にエゾシカの通り道(鹿道)があったとは考えにくく、まして当時の人々も自らに対しても危険な陥し穴を掘り込むことはしなかったであろう。前期後半～中期前半、遺跡では遺構が見られなくなり遺物も疎らになることから、人間の活動が行われなくなった可能性が高い。前期後半からTピットが構築された可能性は全く排除できないが、人間の居住域の選地と、エゾシカの行動圏という点に着目するならば、中期後半と考えたほうが妥当ではないだろうか。中期後半の遺構・遺物の分布に注意すると、イモッペ川両岸の標高20～25mの段丘を境として、様相が異なる。上面では米原4遺跡B地区を中心に集落が営まれており、遺物も大量に出土している。一方、下面では明確な生業活動の痕跡が見られず、遺物は疎らである。これは当時の人々が主要な生活域を段丘上面に限定しており、段丘下面を別の目的のための空間として利用していたことを表している。さらに言えば、居住域と隔てられた、人間が普段立ち入ることのない場所は、自然界＝動物の世界として、一種の「住み分け」が成立していたと考えられる。段丘下面はイモッペ川が下流へと入る地点で、大きく開けた扇状地となっている。この川沿いの平坦部がかつて胆振から日高方面へ移動するエゾシカの通り道であったと推測される(犬飼1952)。また、左右の丘陵から大小の沢がイモッペ川へ向かっており、エゾシカが水を飲むために降りてくることもあったであろう。当該期の人々は狩猟の対象としてエゾシカの行動習性を熟知しており、この地域が猟場として好適であると認識し、陥し穴を仕掛けた可能性が高い。

今回は段丘上面に立地するTP-15・16、あるいは米原4遺跡で住居跡と近接して検出されたTピットの時期について論じるまで至らなかった。現段階では中期後半の集落に前後する時期とまでしか言えないが、やや離れた米原3遺跡の中期末葉～後期初頭の住居跡に伴う時期のものが含まれているのではと考えている。

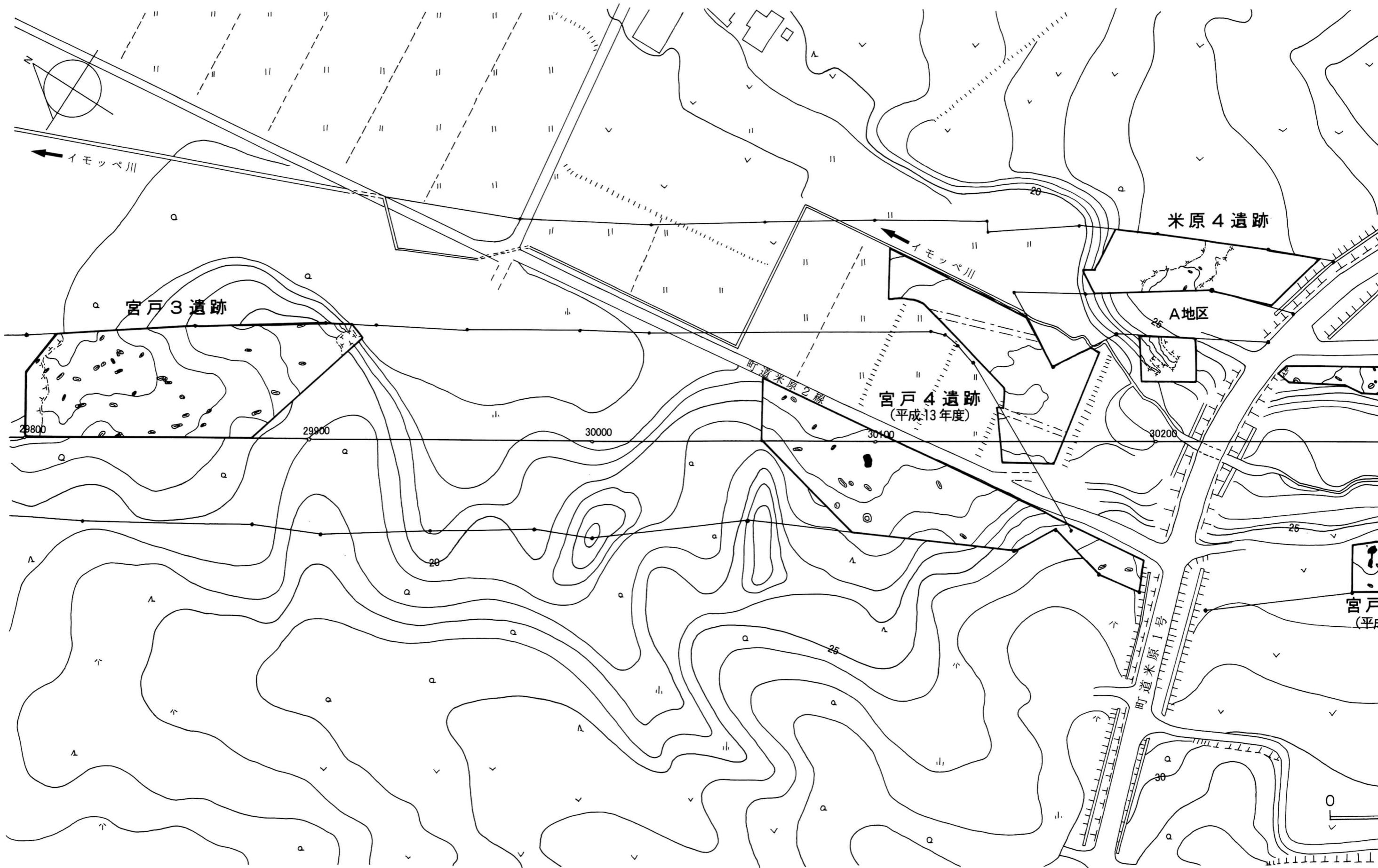
#### (5) むすび

イモッペ川流域の遺跡群の調査は現在も継続中で、平成14年度以降、今年度調査区の周囲を発掘調査する予定である。宮戸3、宮戸4、米原4遺跡は別個の遺跡名が付けられているが、その立地、遺構の分布、遺物の組成などから、同一面上に展開した一つの大きな遺跡として捉えることができる(図VII-1-3)。特にTピットについては、狩猟戦略を考察する上で、調査範囲の広いほうがデータの精度が高まると思われる。幸いにして今回は大規模な高規格道路の建設工事に伴うことから、きわめて広範囲の調査が可能である。イモッペ川流域の遺跡群の様相がより明らかになった次年度以降、資料の蓄積を待って、再考する。また、同僚の大泰司統からは、切り合い関係に着目してTピットの時期を考察した論文(大泰司2002)を発表前にもかかわらず読ませてもらったが、筆者の力量不足から本稿に反映できなかった。改めて謝意を述べるとともに、次年度の自己の課題としたい。

(芝田)



図VII-1-3 イモッペ川流域の遺跡群



図VII-1-3 イモッペ川流域の遺跡群